Ça va? ⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊆ クリスマスのコンサート ⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊆Junko Higasa

ダイナミックというか、いい加減というか、急に思い立って水に寝かさずに昨日の夕飯に 1.5cm 厚に切ったコテキーノを 3 切れ食べたせいで胃に脂が停滞している感があったので、朝食は摂らずに ESSAI をひとつ書き、昼食を食べてから「サントリーホールクリスマスオルガンコンサート 2012」へ行ってきた。目的は今まで見たことがないバロックダンスを観るためである。それというのもフランス系からイタリア系に傾いていながらドイツ物に多く触れるという時間を過ごした今年、私の頭の中では「ルネサンス」ではなく「バロック」という言葉が印象深かったせいである。実に単純な理由である。取りあえず開演前にプログラムにさらりと目を通すと「音楽史にバロック音楽は存在しない」と主張しているはずのフランス系の曲が多かった。

さて、コンサートが始まって、いきなり死んだ。少年少女合唱団は有名な団体らしいが、年齢の割に歌唱力レヴェルは高かったけれど、塩を一振りしてあげたい程度に少し元気がなかったように思う。途中で振ったベルの音が年末の俄か托鉢の鐘の音に聞こえてしまった。チ〜ン。肝心のオルガンはというと、コンサートが始まってから客席のコンコン、ゲホゲホと合奏してバオーーーと一筋に長い音ばかり奏でている。私は「息をしているか？」と疑われるほど静かにするという教育を受けたので咳なんてとんでもない。演奏する方も体調管理が必要なら、聴きに行く方も体調万全での気構えだ。ところが近年のコンサートでは誰かが咳をすると安心して他の人も咳をするので、演奏中でもあちこちでゲホゲホ、コンコン。まだ咳が出そうもない人まで「今のうちにしておこう」と同調するから猶更うるさい。もうダメだ。今日はこのまま最後まで死んでいようと覚悟を決めた。するといきなり黄泉の国の入り口から呼び戻された。バオーバオーの曲の後に、力強い重奏音が鳴り響いてきた。あとでプログラムをよく読むと、ルイ=ニコラ・クレランボー『第一旋法による組曲』7 曲中の 5 曲「グラン・プラン・ジュ／デュオ／トリオ／トランペットの対話／クロモヌルとコルネのレシ」という曲で「クレランボーはフランス後期バロック時代における最高のオルガニストと評されている」とある。どおりで。この曲はダンスの伴奏であったが、他の軽快さが魅力の伴奏曲と違ってダンスがなくても独立した音楽として魅力がある。そしてそのあとのニコラ・ド・グリニもよかったが、彼はフランス北部のランス大聖堂オルガニストで 31 歳で早世した天才だそうだ。この二人のお蔭で気持ちが救われたし、きょうの演奏者の腕も認められた。最初の方の曲が延々と続いたら「このオルガニスト下手なんじゃないの」と思うところだったから。取りあえず生き返って一部が終わった。そこで休憩時間に立った私の頭の中に到来したものがある。それは「NO EARLY MUSIC, NO LIFE?」という CD の 1 曲目に収録されているアリア「そよ風が優しく吹けば」(ジローラモ・フレスコバルディ)の濱田芳通さん(コルネット＆リコーダー奏者)の演奏―風のようでいて泉を思わせる彼のアレンジ。私はよく歩いていてもその時の気候などに影響された気分に即して突然頭の中で音楽が鳴り出すことがあるが、この時はこの曲だった。素敵な音楽の息吹がやさしい「そよ風」を呼んだのだった。

さて、肝心のバロックダンス。衣装が美しく皆さん小顔の美人揃いであったが、その美しさを引き立たせたのは姿勢の良さだった。そしてバロックダンスの特徴はつま先から足をつくこと。またゆるやかな波のような優雅な腕の動きの先にある「指先の表情」こそが究極の美。目は口ほどに…ではなく指が口ほどにものを言う。あの優雅さが女性の特徴だとしたら、女性とは何て美しい存在なのだろう。よく「日本女性は

結構きれいだが姿勢の悪さで損をしている」といわれるが、指先までとは言わないまでも姿勢だけ正したら国内外で「美人」とみられる人が増えるに違いない。何となく浅田真央選手の笑顔とスケーティングの優雅さを思い出した。男女同権社会でも女性らしい優雅さはやはり美しい。そんなわけで美しい女性のダンスのお蔭で、取りあえず二部も何とか死にかけることなく無事終了した。

そして家に帰ってプログラムの表紙を改めて眺める。「はい？」サロン・ド・クリスマス？フランス語なら「サロン・ド・ノエル(Salon de Noël)」英語で同様な表現にするとしたら「サロン・オブ・クリスマス(Salon of Christmas)」ではないかしら。因みに「サロン」はフランス語であるが英語表現としても使われる。大広間とか客間などの人の集まるところ、個人宅で貴族や芸術家が集まるところを意味する。T.V.ドラマ『相棒』の杉下右京のセリフではないけれど「細かいところが気になってしまうのが僕の(私の)悪い癖」―私のこの癖は治りそうもない。瞬間的に目に止まるのだから。

そういえば、今年観たオペラ『メデア』―「ヘロルドさんが」「えっ？そんな役あったっけ？」一瞬首をかしげて「わかった！」あれはドイツ語のオペラだ。Herold と綴って「へーロルト」と読む。伝令官とか使者という意味。確かに英語読みするとヘロルド。この手の誤解は無音の綴りの多いフランス語と綴りをほとんど発音する英語の間で時々起こるが、ドイツ語でもあったか。改めてプログラムを見るとさすが日生劇場。「ein HEROLD」としっかり「ein」を入れてあり「使者」と訳してある。外来語が入り乱れる日本では 2 か国語合体表現が結構多い。「サロン・ド・クリスマス」も和製なのだと解釈しよう。和製フランス語か和製英語かと問われたら困るけれど。

さて、思わぬところへ話が飛んだ。結局そうがっかりすることもなく 18:00 にコンサートが終わった。その時点でお腹が空いていたけれど必要な用があったので夕食は少しお預け。性懲りもなく 20:00 にスパゲッティ・ジェノヴェーゼの M(150g)を食べた。ずっと S(100g)だったのに。そこでようやく思い出した。「最近体重落ちたなぁ」と不思議に思っていたが、よく考えたらダイエットは挫折するので一回の食事量をずっと少なめにしていたのだった。身体も鍛えなければならないけれど、脳も鍛えなければ。しまってあるパネットーネをクリスマスに出すのを忘れないように、と相変わらず食生活はイタリア的嗜好が強いけれど、実はクリスマスは日が長くなり春へ向かうことを愛でる古代ローマの冬至の祭りだったそうだ。それなら異教徒であっても祝ってよいだろう。しかしクリスマスの挨拶だけはイタリア語ではなくて、きょうの…いえもう「きのう」になってしまったコンサートで一番気に入った作曲家の国の言葉で彼に捧げよう。やがて訪れる春の陽光ではなく、ホール周辺を彩る季節のイルミネーションと共に。Joyeux Noël!　Merci pour la musique.　(2012.12.24)

Ça va, merci. Et toi?